日本語版強欲傾向尺度の作成

増井 啓太 追手門学院大学 下司 忠大 早稲田大学 澤田 匡人 宇都宮大学
小塩 真司 早稲田大学

The development of the Japanese version of the Dispositional Greed Scale

Keita Masui (*Otemon Gakuin University*), Tadahiro Shimotsukasa (*Waseda University*),
Masato Sawada (*Utsunomiya University*), and Atsushi Oshio (*Waseda University*)

The purpose of this study was to develop the Japanese version of the Dispositional Greed Scale (J-DGS), and to examine its reliability and validity. The participants in this study were Japanese university students ($N = 856$). The principal component analysis indicated that the J-DGS had a unidimensional structure and adequate internal consistency. There were positive associations between the J-DGS and envy, psychological entitlement, materialism, impulsive buying behavior, extravagance, and neuroticism. Conversely, J-DGS scores were negatively correlated with self-control, self-esteem, life satisfaction, and agreeableness. These results, which are consistent with previous studies, confirmed the concurrent validity of the J-DGS.

Key words: greed, scale development, reliability, validity.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 88, No. 6, pp. 566–573

J-STAGE Advanced published date: January 15, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.88.16240

物やお金を蓄え、消費するといった経済活動はわれわれの社会や生活において極めて重要である。総務省統計局の「平成 28 年家計調査結果」によると、2016 年の 2 人以上の世帯 1 世帯当たりの平均貯蓄額は 2000 年以降で最も高い数値であった（総務省統計局, 2016b）。その一方で、2016 年における 2 人以上の世帯 1 世帯当たりの 1 ヶ月間の平均消費支出は 2000 年以降最も低い水準を示した（総務省統計局, 2016a）。このような経済活動を動機づける要因として、より多くのお金を貯め込みたい、将来のために自身の財産を少しでも多く確保しておきたいという欲望が挙げられる。

私たちは誰しも物やお金に対する欲望を少なからず抱えている。しかしながら、強すぎる欲望は強欲（greed）と呼ばれ、古来より望ましくないものと考えられており、種々の宗教においても忌避すべき概念として、次のように扱われている（Tickle, 2004 屋代訳 2011）。例えば、キリスト教における強欲は、諸悪の

根源である「七つの大罪」の一つに数えられ、その中で最も社会性があり、普遍的な罪とされている。また仏教では、強欲を正しい生き方をする上で障害となる罪、すなわち「三つの毒」の一つと捉え、徳を実現することに障害となるこれらの罪をかわし、克服することの必要性が説かれている。また、ヒンドゥー教では、あらゆる罪の根源であるとも考えられている。

これまで、強欲はわれわれの行動、とりわけ、さまざまな非倫理的、非道徳的な行動と関連することが報告されている。例えば、Collier & Hoeffler (2004) は強欲が内戦を引き起こす要因の一つであることを報告した。Cohen, Gunia, Kim-Jun, & Murnighan (2009) は、強欲が集団の嘘や欺瞞を引き起こす要因であると述べている。このほかにも、強欲に対して好意的な印象を抱くことで非倫理的な振る舞いが増加することが明らかとなっている（Piff, Stancato, Côté, Mendoza-Denton, & Keltner, 2011）。これらの知見は、強欲の高さが種々の問題行動を引き起こす要因であることを示唆するが、強欲がわれわれの行動にどのような影響を及ぼすのかについては必ずしも明らかにされていない。

心理学の分野では、私たちが強欲的な振る舞いを選択するようになる状況要因の検討がなされてきた。例

Correspondence concerning this article should be sent to: Keita Masui, Department of Psychology, Otemon Gakuin University, Nishi-Ai, Ibaraki 567-8502, Japan. (E-mail: k-masui@otemon.ac.jp)

えば、自らの死について考え、死の不可避性に対して脅威を感じるような状況に置かれた人たちは、そうでない人たちと比較して、15年後の自身の経済状況について、より多くのお金を稼ぎ、自分の趣味に多くのお金を費やしているだろうと予想した (Kasser & Sheldon, 2000)。また、Masui, Iriguchi, & Ura (2014) は、コストの有無が他者間の不公正な状況の是正行動に及ぼす影響について検討した。その結果、不公正な状況を是正するためには自身の利益を犠牲にしなければいけない状況では、自身の利益を犠牲にしなくてもよい状況に比べて、是正行動の割合が減少することが示唆された。すなわち、集団の不公正な状態を是正することで自身が損をするような状況では、集団の公正性よりも自身の利益を優先しようとするのが明らかとなった。以上の先行知見から、死の脅威を感じる状況や利他的な行動にコストが伴う状況において、われわれは強欲的に振る舞うことが明らかとなった。

しかしながら、近年になるまで強欲そのものを扱った実証研究はごく限られたものであった。Wang & Murnighan (2011) は、その理由の一つとして、強欲についての一貫した定義が得られていなかったことを挙げている。そして、この問題を解決するために、Seuntjens, Zeelenberg, Breugelmans, & Van de Ven (2015a) はプロトタイプ分析により強欲の定義づけを行った。その結果、強欲を「より多くの物を得ることを望む経験と飽き足らない不満」、すなわち、「より多くの物を求める飽くなき欲望」と定義した。この他にも、Seuntjens, Zeelenberg, Van de Ven, & Breugelmans (2015b) は強欲を「常により多くを求め、現状に決して満足しない傾向」と定義づけ、Krekels & Pandelaere (2015) は、「より多くの資源やお金を求める飽くなき欲望」を強欲の定義としている。また、Seuntjens et al. (2015a) は、強欲の概念にはお金や資源といった物質的な欲求に加えて、高い権力や地位といった非物質的な欲求も含まれていることを指摘している。

強欲の定義づけが示されたことにより、強欲の強さの個人差に着目した研究も実施されるようになった。その中で、Seuntjens et al. (2015b) は、特性的な強欲の程度を測定するための Dispositional Greed Scale (以下、DGS とする) を作成した。この他にも、Krekels & Pandelaere (2015) が作成した尺度や Veselka, Giammarco, & Vernon (2014) によって作成された「七つの大罪」傾向を測定する Vices and Virtues Scale が強欲の程度を測定する尺度としてあり、いずれも一定水準以上の信頼性と妥当性が認められている。

ところで、強欲の定義には複合的な概念が含まれているため、さまざまな心理的特性、および経済活動との関連がこれまで報告されている。例えば、Veselka et al. (2014) は、Vices and Virtues Scale の強欲因子が他者操作性の高さや共感性の低さを特徴とするパーソナリ

ティと関連したことを報告している。加えて、DGS の得点の高さは妬みや心理的特権意識といった感情と深く関わることを示唆されている (Seuntjens et al., 2015b)。妬みとは、他者が自分よりも有利な状況を知ることによって生じる不快な感情を指す (澤田, 2006)。また、心理的特権意識とは、自分が他者よりも多くを得るに値し、多くを得る権利を持っているという、安定して一貫した感覚 (Campbell, Bonacci, Shelton, Exline, & Bushman, 2004; 下司・小塩, 2016) を示す。したがって、強欲的な人ほどこのような他者に対する否定的な感情を抱きやすいことが明らかとなっている。この他にも強欲は、物質的な欲求の強さを指す物質主義傾向、および浪費傾向の高さと関連することが述べられている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。これらのことから、強欲的な人は物質的な要求が高く、浪費家であることが示唆される。

強欲はまた、衝動性や自己制御との関連が指摘されている。Hoch & Loewenstein (1991) によると、欲望と自制心の葛藤の結果、欲望が勝った場合に衝動が生じるとされる。加えて、自制心には限度があることから (Baumeister, 2002)、強欲的な人は欲望が自制心に勝つ場合が多く、その結果、衝動的で、自らの感情や行動を抑制することが困難であるとされる。先行研究では、DGS 得点が高い人ほど衝動的購買行動傾向が高く、自己制御の程度が低かったことが認められている (Seuntjens et al., 2015b)。そして、強欲的な人は現状に満足しない傾向が強いため、自己に対するポジティブな感情である自尊感情や人生に対する満足感が低いことも先行研究の中で報告されている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。さらに、強欲の強さと Big Five との関連については、強欲は協調性と弱い負の関連がある一方で、神経症傾向と弱い正の関連があることが確認されている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。

強欲と私たちの経済活動との関係性について、経済ゲームのパフォーマンスとの関連が指摘されている。このゲームでは提案者役と受け手役の2名のプレイヤーが一定金額の報酬を分け合うことが求められる。そして、DGS の高い人が提案者役になった場合、受け手が不利になるような提案をする割合が高かった。一方で、DGS の高い人が受け手役になった場合には、提案者からの不公平な提案の拒否率が高かった。これらの結果より、強欲的な人は他者に対しては不公正に振る舞うが、自身に対する不公正な行為には拒絶反応を示すことが明らかとなった (Seuntjens et al., 2015b)。強欲と経済的な問題行動との関連について検討した研究では、DGS 得点の高い高校生ほど1ヵ月の消費金額や親や友人からの借金の額が多かったことを報告している (Seuntjens, Van de Ven, Zeelenberg, & Van der Schors, 2016)。

上述したように、強欲は争い、犯罪といった非倫理的・非道徳的行動、ならびに経済的な問題行動と密接に関わる概念である (Collier & Hoefler, 2004)。これらの行動はわれわれの安全・安心を脅かす要因である。そのため、強欲が私たちの行動へ及ぼす影響過程を検討することは、さまざまな問題行動の生起過程を明らかにすることにつながり、結果として、安全・安心な社会の確立へと発展させていくために有益であると考えられる。その中で、安定した回答が得られ、強欲の概念を適切に測定できる尺度の開発はわが国の強欲研究の活性化を促すと考えられる。そこで本研究では Seuntjens et al. (2015b) による DGS を邦訳した日本語版強欲傾向尺度 (Japanese version of the Dispositional Greed Scale: 以下、J-DGS とする) を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。DGS はオランダやアメリカなどさまざまな国、年齢層を対象とした大規模調査によって、安定した 1 因子構造を示し、高い内的一貫性を持つ尺度であることが見出されている。さらに、強欲と関連する概念や経済ゲームのパフォーマンスとの関連から DGS の併存的妥当性、および予測的妥当性が確認されている (Seuntjens et al., 2015b)。

J-DGS 作成に際して、はじめに、J-DGS が原版と同様に 1 因子構造であることを主成分分析により確かめる。J-DGS の信頼性の検討については、Cronbach の α 係数、 ω 係数、ならびに項目-全体相関係数 (Item-Total correlation: 以下、ITC とする) を算出し、内的一貫性を検討する。そして、J-DGS の妥当性に関して、先行研究 (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b) において DGS との関連が示唆されている妬み、心理的特権意識、物質主義傾向、衝動的購買行動傾向、浪費傾向、セルフコントロール、自尊感情、人生に対する満足感、Big Five を測定し、J-DGS との関連を調べることで、J-DGS の併存的妥当性について検討する。

方 法

調査対象者

本研究の対象者は、首都圏の大学に通い、心理学の授業を受講している大学生 881 名 (男性 278 名、女性 598 名、不明者 5 名) であった。平均年齢は 19.64 歳 ($SD = 2.14$) であった。

質問紙

J-DGS 原著者に翻訳の許可を得た後、著者らが並行して項目の邦訳を行った。その際に、項目の内容を適切に反映しつつ、日本語として不自然な表現にならないように留意しながら翻訳を行った。そして、英文校閲業者を通じて、英語を母国語とした、本研究とは無関係の第三者に項目のバックトランスレーションを

依頼した後、原著者に内容の確認を求めた。原著者から指摘を受けた表現については修正を繰り返し、最終的には、原版の項目と日本語版の項目に相違がないことの確認が得られたため、J-DGS の原案とした¹。J-DGS は 7 項目から構成されており、それぞれ「1. 全く当てはまらない」から「5. とても当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。

日本語版 Benign and Malicious envy Scale J-DGS の併存的妥当性を検討するため、特性的な妬みやささの程度を測定する Benign and Malicious envy Scale (以下、BeMaS とする: Lange & Crusius, 2015) の日本語版 BeMaS (澤田・藤井, 2016) を使用した。この尺度は 10 項目、6 件法 (「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」) で回答を求めるもので、良性妬み因子 (例: 他人を羨ましがすることは、私にとって目標を達成する刺激になる) と悪性妬み因子 (例: 優れた人たちが有利さを失うように、私は願う) の 2 因子で構成されていた。

セルフコントロール尺度 先行研究で指摘されている DGS とセルフコントロールとの負の関連が J-DGS においても認められるかどうかを検討するため、Tangney, Baumeister, & Boone (2004) によって作成された Belief Self-Control Scale の日本語短縮版 (尾崎・後藤・小林・沓澤, 2016), 13 項目 (例: 自分にとってよくないことでも、楽しければやってしまう) を使用した。「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

衝動的購買行動尺度 J-DGS との関連を検討するため、Rook & Fisher (1995) により開発された Buying Impulsiveness Scale を原田・吉澤・吉田 (2010) が翻訳したものを使用した。本尺度は 9 項目 (例: 私はよく、成り行きに任せて買い物をする) からなり、5 件法で回答するものであった。

心理的特権意識尺度 先行研究において確認された DGS と心理的特権意識との関係性が J-DGS においても確認されるかを確かめるため、Campbell et al. (2004) の Psychological Entitlement Scale を下司・小塩 (2016) が翻訳したものを使用した。本尺度は 9 項目 (例: 私は他の人よりも特別な扱いを受けて当然だというのが正直な気持ちだ) からなり、「1. まったくそう思わない」から「7. 強くそう思う」までの 7 件法で回答を求めた。

物質主義尺度 J-DGS との関連を検討するため、Richins & Dawson (1992) が開発した Material Values Scale の短縮版 (Richins, 2004) を呉・寺島 (2016) が翻訳したものを使用した。本尺度は 6 項目 (例: ぜいたくな生活が好きだ) からなり、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの 4 件法で回答を求めた。

浪費傾向尺度 J-DGS との関連を検討するため、

¹ 2016 年 5 月 18 日に原著者より最終的な許可を得た。

Table 1
J-DGS の主成分分析結果, α 係数および ω 係数

項 目	サンプル			
	1	2	3	all
	N = 257	N = 284	N = 340	N = 881
1. 私はいつも必ずもっと欲しくなってしまう	.78	.77	.78	.78
2. 実際に, 私は欲張りなところがある	.76	.66	.74	.73
3. どれだけお金があってもあり過ぎるようなことはない	.45	.50	.51	.49
4. 私は何かを得るとすぐ, 次に欲しいものを考え始めてしまう	.70	.72	.73	.72
5. どれだけ多くを持っても, 私は決して完全に満足しない	.73	.74	.68	.72
6. 私の人生のモットー (指針/座右の銘) は「多ければ多いほど良い」である	.61	.61	.46	.56
7. ものが多すぎて困るなんて, 私には想像できない	.39	.38	.30	.35
固有値	2.92	2.85	2.73	2.83
寄与率 (%)	41.71	40.76	38.99	40.37
α 係数	.75	.74	.72	.74
ω 係数	.82	.82	.81	.82

Edwards (1993) が開発した強迫性購買尺度のうち, 必要以上に物を購入する傾向を測定する「浪費性向」因子の 5 項目を使用した (例: 買い物をしすぎてしまうことがある)。なお, 日本語版は池内 (2014) によって作成された。「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

自尊感情尺度 先行研究では, DGS と自尊感情との間に負の関連が認められている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。このことが J-DGS においても認められるかを確認するため, Rosenberg (1965) が開発した自尊感情尺度の日本語版 (桜井, 2000) 10 項目 (例: 私は, 自分に満足している) を用いた。「1. いえ」から「4. はい」の 4 件法で回答する尺度であった。

人生に対する満足尺度 J-DGS の併存的妥当性を検討するため, Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) の Satisfaction With Life Scale (以下, SWLS とする) を角野 (1994) が翻訳した尺度を用いた。日本語版 SWLS は 5 項目 (例: 大体において, 私の人生は理想に近い), 7 件法 (「1. 全くそうでない」から「7. 全くそうだ」) で回答を求めた。

The Japanese version of Ten Item Personality Inventory Big Five の 5 特性を測定するため Ten Item Personality Inventory (Gosling, Rentfrow, & Swann, 2003) の日本語版である The Japanese version of Ten Item Personality Inventory (以下, TIPI-J とする) (小塩・阿部・カトローニ, 2012) を使用した。TIPI-J は外向性, 協調性, 勤勉性, 神経症傾向, 開放性の各因子を 2 項目ずつ (例: 活発で, 外向的だと思う), 7 件法で回答する質問紙であった。各因子の項目間の相関係数を算出した結果, 外向性は $r = -.56$, 協調性は $r = -.20$, 勤勉性は $r = -.42$, 神経症傾

向は $r = -.18$, 開放性は $r = -.38$ であった。

手続き

調査は 2016 年 6 月下旬から 7 月中旬にかけて, 大学の講義時間の一部を用いて実施された。なお, 回答の負担を考慮し, 本研究では質問項目の異なる 3 種類の調査票を作成し, 調査対象者にはそのうちの一つに回答を求めた。最初の調査票は J-DGS, 日本語版 BeMaS, セルフコントロール尺度, 衝動的購買行動尺度から構成されており, 回答者は 257 名であった (サンプル 1)。二つめの調査票は J-DGS, 心理的特権意識尺度, 物質主義尺度, 浪費傾向尺度が含まれており, 284 名の調査対象者が回答した (サンプル 2)。最後は J-DGS, 自尊感情尺度, 日本語版 SWLS, TIPI-J からなる調査票であり, 340 人が回答した (サンプル 3)。対象者はいずれかの調査票にランダムに回答した。回答に要した時間は約 20 分であった。

結 果

最初に J-DGS が原版と同様に 1 因子構造を示すことを確認するため, サンプルごとに主成分分析を実施した。その結果, いずれのサンプルにおいても「ものが多すぎて困るなんて, 私には想像できない」の 1 項目を除いた項目で主成分負荷量が .40 を超えていた (Table 1)。残りの 1 項目の主成分負荷量については, サンプル 3 を除き .35 よりも大きな値を示した。固有値はそれぞれ 2.92, 2.85, 2.73 であった。また, サンプルごとの第 1 成分の寄与率は 41.71%, 40.76%, 38.99% であった。次に, 三つのサンプルの結果を合わせ, 再度主成分分析を行ったところ, こちらも「も

Table 2
J-DGS の各項目の平均点, 標準偏差, 項目-全体相関係数

項 目	サンプル	<i>M</i>	<i>SD</i>	ITC
1. 私はいつも必ずもっと欲しくなってしまう	1	3.22	1.08	.71
	2	3.35	1.04	.71
	3	3.26	1.07	.72
	all	3.28	1.06	.72
2. 実際に, 私は欲張りなところがある	1	3.58	1.02	.70
	2	3.73	0.95	.61
	3	3.57	1.04	.67
	all	3.62	1.01	.66
3. どれだけお金があってもあり過ぎるようなことはない	1	3.88	1.16	.50
	2	3.89	1.18	.55
	3	3.85	1.10	.54
	all	3.87	1.14	.53
4. 私は何かを得るとすぐ, 次に欲しいものを考え始めてしまう	1	3.01	1.27	.69
	2	3.18	1.19	.69
	3	3.06	1.12	.70
	all	3.08	1.19	.70
5. どれだけ多くを持っても, 私は決して完全に満足しない	1	2.94	1.18	.72
	2	3.12	1.12	.72
	3	2.88	1.10	.68
	all	2.97	1.14	.70
6. 私の人生のモットー (指針/座右の銘) は「多ければ多いほど良い」である	1	2.09	1.07	.64
	2	2.18	1.14	.64
	3	2.07	0.96	.52
	all	2.11	1.05	.60
7. ものが多すぎて困るなんて, 私には想像できない	1	2.36	1.17	.48
	2	2.31	1.09	.47
	3	2.42	1.13	.45
	all	2.37	1.13	.46

注) ITC = Item-Total correlation.

サンプル 1 : $N = 257$, サンプル 2 : $N = 284$, サンプル 3 : $N = 340$, サンプル all : $N = 881$.

のが多すぎて困るなんて, 私には想像できない」の 1 項目を除いた項目で主成分負荷量が .40 を超えていた (Table 1)。また, 残りの 1 項目の主成分負荷量は .35 以上であることが見出された。固有値は 2.83 であり, 第 1 成分の寄与率は 40.37% であった。

次いで, J-DGS の信頼性について検討するために, クロンバックの α 係数を算出した。その結果, 全てのサンプルにおいて一定水準以上の値を示すことが確認された ($\alpha = .72 - .75$) (Table 1)。また, ω 係数を算出したところ, いずれのサンプルにおいても十分な値を示した ($\omega = .81 - .82$) (Table 1)。

J-DGS の各項目の平均値, 標準偏差, ITC を Table 2 に示す。J-DGS の各項目について, 三つのサンプル

間と七つの項目間の平均値差を確認するために, サンプルと項目を要因とした 2 要因混合デザインの分散分析を実施した。その結果, サンプルの主効果は有意ではなかった ($F(2, 851) = 1.76, ns, \eta_p^2 = .00$)。同様に, サンプル $\times$ 項目の交互作用も有意ではなかった ($F(10, 4394) = 1.19, ns, \eta_p^2 = .00$)²。以上の結果, 三つのサンプル

² 項目の主効果は有意であった ($F(5, 4394) = 386.72, p < .001, \eta_p^2 = .31$)。多重比較の結果, 「どれだけお金があってもあり過ぎるようなことはない」の得点は他の項目の得点よりも有意に高く, 「私の人生のモットー (指針/座右の銘) は『多ければ多いほど良い』である」の得点は他の項目の得点よりも有意に低いことが明らかとなった ($ps < .001$)。

Table 3
J-DGS と関連尺度との相関係数

	α	サンプル		
		1 $N = 257$	2 $N = 284$	3 $N = 340$
良性妬み	.82	.22 **		
悪性妬み	.87	.36 **		
衝動的購買行動	.90	.42 **		
セルフコントロール	.80	-.27 **		
心理的特権意識	.87		.34 **	
物質主義傾向	.77		.46 **	
浪費傾向	.60		.40 **	
自尊感情	.86			-.18 **
人生に対する満足感	.85			-.13 *
外向性	-			.08
協調性	-			-.23 **
勤勉性	-			-.06
神経症傾向	-			.16 **
開放性	-			.07

* $p < .05$, ** $p < .01$

ル間での各項目の平均点に有意な差はなかったことが確認された。ITC に関して、Table 2 より、ITC は .45 から .72 までの値を示した。全ての項目の ITC が .30 を超えていたことから、J-DGS が十分な内的一貫性を有した尺度であることが確認された (Nunnally & Bernstein, 1994)。

続いて、日本語版 BeMaS、セルフコントロール尺度、衝動的購買行動尺度、心理的特権意識尺度、物質主義尺度、浪費傾向尺度、自尊感情尺度、日本語版 SWLS の α 係数を算出した (Table 3)。そして、J-DGS の併存的妥当性を検討するため、J-DGS と関連尺度との相関係数を算出した。なお、上記の尺度、および TIPI-J の回答に欠損のなかった 854 名のデータを分析対象とし、いずれの尺度も平均点を分析に使用した。

相関係数を算出したところ、J-DGS は良性妬み、悪性妬み、衝動的購買行動、心理的特権意識、物質主義傾向、浪費傾向、神経症傾向との間に正の有意な関連が見出された ($rs > .16, ps < .01, 95\%CI = .06 - .55$)。対して、セルフコントロール、自尊感情、人生に対する満足、協調性との間に負の有意な関連が認められた ($rs < -.13, ps < .05, 95\%CI = -.38 - -.02$) (Table 3)。

考 察

本研究の目的は Seuntjens et al. (2015b) によって作成された特性的な強欲の程度を測定する DGS の日本語版である J-DGS を作成し、その信頼性と妥当性を

検討することであった。主成分分析の結果、J-DGS は原版と同様に 1 因子構造であることが確認された。また、J-DGS の 1 因子構造は、構成の異なる複数のサンプルにおいて一貫して確認されたため、比較的安定したものであるといえるだろう。次に、J-DGS の α 係数および ω 係数を算出した。その結果、いずれの値も一定水準以上の値を示した。ITC を算出したところ、全ての項目で一定水準の値を超えていたことが確認され、J-DGS が十分な内的一貫性を持つ尺度であることが確認された。

そして、J-DGS の妥当性を検討するため、先行研究の中で強欲と関連が指摘されている諸概念との関連を調べた。先行研究において、DGS 得点は妬みや心理的特権意識といった他者に対する否定的な感情との関連が指摘されている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b; Veselka et al., 2014)。本研究においても、J-DGS の高さは悪性妬み、心理的特権意識の高さと関連することが明らかとなり、これらの結果は先行研究と一致するものであった。その一方で、先行研究では、強欲と良性妬みについては検討されていない。悪性妬みが優れた他者をうらやみ憎み、その他者を引きずり下ろそうとする意図と関連するのに対して、良性妬みとは、他者の優れた状態をうらやみ、その人になるために努力し、自分自身を高めようと思うことを指す (澤田・藤井, 2016)。これらの妬みの概念を踏まえると、強欲の強い人は現状に満足せず、より多くを求めため、そのような人ほど自身よりも優れた立場にいる他者を強くうらやむ傾向にあるという本研究の結果は妥当なものであるといえよう。また、良性妬みの高さは学業の目標を高め、結果として学業成績を高めるという結果が得られている (澤田・藤井, 2016)。上記の結果と強欲と良性妬みとの間に正の関連が認められたという本研究の結果から、強欲的な人ほど目標達成のために自分を高め、達成動機が高まった結果、高いパフォーマンスを示すという可能性が推察される。事実、強欲の程度の高い人ほど多くの収入を得ているという知見もある (Seuntjens et al., 2016)。強欲的な人のポジティブな側面についてはこれまでほとんど検討されていないため、上記の可能性を検討することで強欲という特性を「好ましくない特性」として扱うのではなく、高いパフォーマンスを得るための一特性として捉え直すことが可能となると考えられる。

続いて、強欲の程度は、物質主義傾向や浪費傾向といった、多くの物やお金を求め、それらを使用する傾向の高さと関連することが示唆されている。同様に、DGS 得点の高い人は、衝動的で、自己制御に困難を示すことも認められている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。これらの点について、J-DGS と物質主義傾向、浪費傾向、衝動的購買行動傾

向、セルフコントロール尺度との関連を検討した結果、J-DGS は物質主義傾向、浪費傾向、衝動的購買行動傾向と正の関連を示した一方で、セルフコントロール尺度とは負の関連を示した。以上のことから、本研究の結果が先行研究の結果と一致していたことが確認された。そして、強欲的な人は現状に満足しない傾向が強いことから、自尊感情や人生に対する満足感が低いことも示唆されている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。本研究においても、J-DGS は自尊感情、人生に対する満足感との間にいずれも負の関連を示し、先行研究と同様の結果が確認された。最後に、強欲と Big Five との関連について、強欲は協調性と弱い負の関連がある一方で、神経症傾向と弱い正の関連があることが認められている (Krekels & Pandelaere, 2015; Seuntjens et al., 2015b)。本研究でも J-DGS と TIPI-J の協調性との間には弱い負の関連が認められたのに対して、神経症傾向との間には弱い正の関連が見出された。これまで述べてきた J-DGS と他の尺度との関係性の結果より、J-DGS の併存的妥当性が確認された。

J-DGS が原版と同様に安定した因子構造を持ち、十分な内的一貫性と併存的妥当性を示したことが本研究によって確認されたことは、わが国においても強欲の個人差を適切に捉えることが可能となったことを示唆する。今後の研究において、強欲と争い、犯罪といった非倫理的・非道徳的行動との関連を検討することで、強欲がわれわれの行動へ及ぼす影響過程が明らかとなり、その結果、さまざまな問題行動の生起過程が明らかになると考えられる。その結果、安全・安心な社会の確立に向けた知見の獲得へと発展させていくことが可能となると考えられる。

最後に本研究の課題について述べる。まず、J-DGS の主成分分析において、主成分負荷量が十分な値を示さなかった項目（「ものが多すぎて困るなんて、私には想像できない」）があった。主成分負荷量が小さかった理由として、回答者が「ものが多すぎる」という表現を「自分の所有物が多い」という意味ではなく、単に「ものが多い」という漠然とした状況として捉え、著者らが意図した内容とは異なった捉え方をされた可能性が考慮される。この問題を解決するため、分かりづらい表現を修正し、項目の一層の精緻化を図る必要がある。

また、本研究では J-DGS の予測的妥当性については検討できていない。例えば、Seuntjens et al. (2015b) は、DGS の予測的妥当性を検討するために経済ゲームを実施し、そのゲームのパフォーマンスに及ぼす強欲の影響を検討している。そして、DGS の高い人は、他者が不利になるような提案をする割合が高かった一方で、他者からの不公正な提案には拒否する割合が高かったことを報告している (Seuntjens et al., 2015b)。

この他にも、Piff et al. (2011) の研究では、強欲に対して好意的な印象を抱くことで、おつりを盗む、賄賂を受け取る、顧客に不当な金銭を要求するといった非倫理的な行動への性向が高くなったことを報告している。さらに、Seuntjens et al. (2016) は、強欲的な人ほど 1 ヶ月の消費金額や知り合いからの借金の額が多かったことを見出している。また、これらの影響は 1 ヶ月の収入を統制した後も同様に確認されている。今後は J-DGS が経済ゲームのパフォーマンスや非倫理的な行動、経済活動とどのような関係性を示すかを検討することで、J-DGS の妥当性に関するより詳細な知見の獲得が求められる。

本研究の対象者は大学生に限られていた。先行研究では DGS 得点と年齢、学歴との間には負の関係性があることが指摘されている (Seuntjens et al., 2015b)。以上のことから、今後はさまざまな属性、職種の人たちを対象として調査を行い、J-DGS のさらなる精査に努めることが必要である。

引用文献

- Baumeister, R. F. (2002). Yielding to temptation: Self-control failure, impulsive purchasing, and consumer behavior. *Journal of Consumer Research*, 28, 670–676.
- Campbell, W. K., Bonacci, A. M., Shelton, J., Exline, J. J., & Bushman, B. J. (2004). Psychological entitlement: Interpersonal consequences and validation of a self-report measure. *Journal of Personality Assessment*, 83, 29–45.
- Cohen, T. R., Gunia, B., Kim-Jun, S., & Murnighan, J. K. (2009). Do group lie more than individuals? Honesty and deception as a function of strategic self-interest. *Journal of Experimental Social Psychology*, 46, 1321–1324.
- Collier, P., & Hoeffler, A. (2004). Greed and grievance in civil war. *Oxford Economic Papers*, 56, 563–595.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71–75.
- Edwards, E. A. (1993). Development of a new scale for measuring compulsive buying behavior. *Financial Counseling and Planning*, 4, 67–84.
- 呉 金海・寺島 拓幸 (2016). 「望子成龍」意識と物質主義——上海市中心八区の調査を通じて—— 応用社会学研究, 58, 333–340.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, 37, 504–528.
- 原田 知佳・吉澤 寛之・吉田 俊和 (2010). 社会的自己制御と BIS/BAS・Effortful Control による問題行動の弁別的予測性 パーソナリティ研究, 19, 76–78.
- Hoch, S. J., & Loewenstein, G. F. (1991). Time inconsistent

- preferences and consumer self-control. *Journal of Consumer Research*, 17, 492–507.
- 池内 裕美 (2014). 人はなぜモノを溜め込むのか——ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討—— *社会心理学研究*, 30, 86–98.
- 角野 善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale (SWLS)) 日本版作成の試み *日本教育心理学会第36回総会発表論文集*, 192.
- Kasser, T., & Sheldon, K. M. (2000). Of wealth and death: Materialism, mortality salience, and consumption behavior. *Psychological Science*, 11, 348–351.
- Krekels, G., & Pandelaere, M. (2015). Dispositional greed. *Personality and Individual Differences*, 74, 225–230.
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41, 284–294.
- Masui, K., Iriguchi, S., & Ura, M. (2014). Assured rewards facilitate non-intervention in unfair situations by high psychopathy individuals. *International Journal of Psychological Studies*, 6, 56–64.
- Nunnally, J. C., & Bernstein, I. H. (1994). *Psychometric theory*. New York: McGraw-Hill.
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ, ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み *パーソナリティ研究*, 21, 40–52.
- 尾崎 由佳・後藤 崇志・小林 麻衣・沓澤 岳 (2016). セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*, 87, 144–154.
- Piff, P. K., Stancato, D. M., Côté, S., Mendoza-Denton, R., & Keltner, D. (2011). Higher social class predicts increased unethical behavior. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 109, 4086–4091.
- Richins, M. L. (2004). The material values scale: Measurement properties and development of a short form. *Journal of Consumer Research*, 31, 209–219.
- Richins, M. L., & Dawson, S. (1992). A consumer values orientation for materialism and its measurement: Scale development and validation. *Journal of Consumer Research*, 19, 303–316.
- Rook, D. W., & Fisher, R. J. (1995). Normative influences on impulsive buying behavior. *Journal of Consumer Research*, 22, 196–203.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65–71.
- 澤田 匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処——感情心理学からのアプローチ—— *新曜社*
- 澤田 匡人・藤井 勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか? —— 良性妬みに着目して —— *心理学研究*, 87, 198–204.
- Seuntjens, T. G., Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Van der Schors, A. (2016). Greed and adolescent financial behavior. *Journal of Economic Psychology*, 57, 1–12.
- Seuntjens, T. G., Zeelenberg, M., Breugelmans, S. M., & Van de Ven, N. (2015a). Defining greed. *British Journal of Psychology*, 106, 505–525.
- Seuntjens, T. G., Zeelenberg, M., Van de Ven, N., & Breugelmans, S. M. (2015b). Dispositional greed. *Journal of Personality and Social Psychology*, 108, 917–933.
- 下司 忠大・小塩 真司 (2016). 特権意識の構造と特徴 —— 3つの特権意識に着目して —— *パーソナリティ研究*, 24, 179–189.
- 総務省統計局 (2016a). 家計調査 (家計収支編) —— 時系列データ (二人以上の世帯) —— Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/kakei/longtime/zuhyou/18-01-an.xls> (2017年5月30日)
- 総務省統計局 (2016b). 家計調査報告 (貯蓄・負債編) —— 平成28年 (2016年) 平均結果速報 (二人以上の世帯) —— Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/sav/sokuhou/nen/pdf/yoyaku.pdf> (2017年5月30日)
- Tangney, J. P., Baumeister, R. F., & Boone, A. L. (2004). High self-control predicts good adjustment, less pathology, better grades, and interpersonal success. *Journal of Personality*, 72, 271–324.
- Tickle, P. (2004). *Greed: The seven sins*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- (ティックル, P. 屋代 通子 (訳) (2011). 強欲の宗教史 *築地書館*)
- Veselka, L., Giammarco, E. A., & Vernon, P. A. (2014). The dark triad and the seven deadly sins. *Personality and Individual Differences*, 67, 75–80.
- Wang, L., & Murnighan, J. K. (2011). On greed. *Academy of Management Annals*, 5, 279–316.

—— 2017. 3. 27 受稿, 2017. 7. 22 受理 ——